

## 学童期の発声と教員採用試験弾き歌い24曲

The singing utterance in the grande-schooler and 24 playing singing of teacher's certificate enamination

岡 元 眞 理 子  
Mariko OKAMOTO

### 1. はじめに

小学校「音楽」が教科として「小学唱歌集」が発行されたのは、明治14年の「小学校教則綱領」により、小学初等科の教科書となった。明治35年から“国定教科書”が生まれ、唱歌は国定となった。唱歌という科目名ではあるが、「音楽」が学校教育に必修科目として定められ存在したてきた。また、明治40年には、小学校令が改正され、43年には「尋常小学読本唱歌」、さらに大正3年までに「尋常小学唱歌」として6冊発行した。この6冊の中にある（例、）の歌は現在も「小学音楽」教科書にあり、採用2次試験にも課題曲として存在する。

〔例、春がきた、もみじ、ふるさとなど〕

世界では「音楽」が必修科目としている国は少なく、「音楽の国」いわれるドイツでさえ、その学習方法は異なり、必修科目ではない。世界ではスウェーデン、スイス、韓国そして日本が音楽を国で定めた小学校科目にしている。しかし、アメリカなどは州ごとに科目として置いていところもあるという。日本においては、小学生は皆「音楽」教育を受ける。それでは、全国で決められている「小学校教員採用試験2次試験」において、出題される24曲の弾き歌い曲目とは、どのような曲であるか考察することとする。

### 2. 問 題

次のことについて、問題を提起する。

1) 2次試験主題曲24曲について、

その24曲の特色、教育的事項、音楽的分析などを行い考察する。歌曲内容のどの箇所の問題があり、良い点はどのような箇所かという点である。

最初に小学校現場で教材活用の薄い『全国教育委員会教員採用試験で行われる「小学音楽弾き歌い=24曲」(共通教材)』の教員養成期間における学習目的は、採用試験のためだけであるという点である。

2) 文部省「教育法」に示されている「音楽的発達を促す」ことについて、

「音楽的発達を促す」ということを実践するにあたり、少年期発達段階における“歌う”

という精神的身体的作用が、大きな意味があることを考察する。平成10年12月告示『小学校学習指導要領・第2章・第6節「音楽」』2つの目標、＜1. 音楽全体について＞ ＜2. 学年について＞ 述べられているが、音楽教育において“心身の成長に関わる部分”の提起がない点について音楽の特性を考え、方向性を示唆することとした。

3) 体の成長と児童発声の「発語・発声」についての＜人間（心身）発達＞について、

音楽が学童期精神性向上に重要である点について、ここでは発語と発声から促せられる精神安定、思考力向上、想像力向上など感性充実が提供できると考える。その原点となることについて考察する。

### 3. 方 法

1) 「小学音楽弾き歌い=24曲」（共通教材）について、曲内容（①速度②調③小節数④母音数⑤拍子）、曲想、歌唱指導（発声法）、感情表現と情操心育成について、楽曲の問題点を調べる。

2) 文部省「教育法」に示されている「音楽の発達を促す」ことについて、音楽の特性について考察する。

3) 児童発声の「発語・発声」についてと＜人間（心身）発達＞について

子どもの成長において、児童発声の「発語・発声」については大きな＜人間（心身）発達＞を伴う点について、感性の充実を考察する。

| 「曲名」（作詞者・作曲家・作詞作曲状況）<br>「作曲年」（導入年）                                 | 曲内容（①速度②調③小節数④母音数<br>〔※1〕⑤拍子⑥曲想                                       | 歌唱指導〔改善点を含む〕<br>1. 曲想=感情表現と情操心育成, 2. 発声法  |
|--|---|---|
| 1. 「うみ」<br>文部省唱歌<br>作詞 林 柳波<br>作曲 井上武士<br>昭和16年<br>「国民学校ウタノホン上1年用」 | ①「J」=88~100<br>②ト長調<br>③8小節<br>④14ヶ<br>⑤4分の3<br>発声的考察<br>〔音程が低い。〕     | 1. 大きな海のように、大きな心を持ち “大波も青い波”もあるとは、いいことばかりではない。終点がわからないほど、“海は大きく”海を渡るとよその国“繋がっている。想像心を育む。★小学校ではほとんど歌われていない。童謡曲集には含まれている。合唱団※3聴いたことがあるとこたえた子、歌ったことがある子はいなかった。3拍子で波のようなリズムを感じるにより、協調心を育てることが可能である。たった8小節であるが、想像性も養える。<br>2. 1番2番3番ともウから始まる。ウの発音は現代人にとり、非常に困難な音声である。また、母音が多く、発声により、ピッチを合わせることができる。N,Mが多く、共鳴を頭洞に導きやすいといえる。 |
| 2. 「かたつむり」<br>文部省唱歌  | ①「J」=88~96<br>②ハ長調<br>③12小節<br>④5ヶ<br>⑤4分の2<br>発声的考察<br>〔音程が単調、音程は低い〕 | 1. 歌の内容は、子ども（教科書では1年生導入曲）の心情を育むことができる。かたつむりが、ユーモラスに角や槍を持っている姿ほほえましい。★幼稚園で歌ったことがあると答え、全員が知っていた。<br>2. 「N=ン」→「でんでん」の発音が無声音で発声すること、7小節目、9小節目のDの音を頂点にして、ディナーミク※2をつける。さらにア母音「あうつくしい〜」は鼻腔に当てるように発声することが大事である。   |

|  |  |  |
|--|--|--|
| <p>3. 「ひのまる」<br/>文部省唱歌<br/>作詞 高野辰之<br/>作曲 岡野貞一</p>   | <p>①「J」=100~108<br/>②へ長調<br/>③16小節<br/>④12ケ<br/>⑤4分の2<br/>発声的考察<br/>〔音程は安定、適している〕</p>      | <p>1. 「ひのまる」という意味は、「日本の旗よ」と国旗のひのまるを意識している。がしかし、子どもの心に、白い色に赤い丸の鮮やかさは、自己の表現に繋がり、さらに青空に高くたなびくことは、勇気を表現している。★調査上では「知っている子」、「歌ったことのある子」はいなかった。<br/>2. 2拍目を強く歌いがちとなるので、一拍目を重視する。「ああ〜」の口腔内を暖めるために「ムアア」と鼻音にして発声するとよく音程も定まり、発音もよくなる。</p>  |
| <p>4. 「ひらいたひらいた」<br/>わらべ歌</p>  | <p>①「J」=54~58<br/>②イ短調<br/>③12小節<br/>④9ケ<br/>⑤4分の2<br/>発声的考察<br/>〔音程は良い〕</p>               | <p>1. 単純なメロディーの繰り返しによって、楽しさとリズム感を合わせている。四季の移り変わりの速いことと人の営みも早いことを子どもの心に表現している。★幼稚園・保育園で歌われる。<br/>2. 「おもったら」のところが、不自然である。「おーもったら〜」と続くのは、ニュアンス的にそぐわないといえる。♪♪♪三連符の「おーも」とすると歌いやすい。ヒはイに重点を置き発声する。</p>  |
| <p>5. 「かくれんぼ」<br/>文部省唱歌<br/>作詞 林 柳波<br/>リュウハ<br/>作曲 下総皖一</p>   | <p>①「J」=108~116<br/>②イ短調<br/>③12小節<br/>④12ケ<br/>⑤4分の2<br/>発声的考察<br/>〔音程低い〕</p>             | <p>1. 遊び歌として、現在も歌われている。多くは祖父母からの歌い継ぎで行われている。学校では歌われない。<br/>2. 付点音符をしっかりと歌うことにより、楽しい気持ちを持たせること、リズム打ちなども楽しく学べる。★幼稚園・保育園では歌われることがある。家庭教育での伝承音楽に入る。</p>  |
| <p>6. 「春がきた」<br/>文部省唱歌<br/>作詞 高野辰之<br/>作曲 岡野貞一<br/>明治43年<br/>「尋常小学読本」<br/>※4. 小学1年から6<br/>年まで一冊の本にまと<br/>めた音楽教科書</p> | <p>①「J」=116~126<br/>②ハ長調<br/>③8小節<br/>④5ケ<br/>⑤4分の4<br/>発声的考察<br/>〔低い〕</p>                 | <p>1. 2拍目を8分音符にすることにより、慌てたような気持ちを表現し、嬉しさを出している。1段目（1~4小節）はラソミドレの半終止を一音上げること、谷型で「そして、どうしたの？」という続きを誘導している。2段目（5~8小節）はさらに高いソミレソドとすること、山型で終止を導いている。この2箇所を考慮して演奏（歌う）すると良い。★小学校で習う。小学生はよく知っている。調査では半分以上の子が歌ったことがあると答えた。<br/>2. 鼻音の勉強にとっても良い。母音が少ない中で、ハ・ガ・キ・ナ・マ・ヤ・サ・ノなどが共鳴腔にデッキング※3させることを補っている。待ち遠しい春について、お話を添えると感性を育むことに良い曲である。</p>      |
| <p>7. 「虫の声」<br/>文部省唱歌</p>  | <p>①「J」=76~84<br/>②ニ長調<br/>③20小節<br/>④15ケ<br/>⑤4分の2<br/>発声的考察<br/>〔低い〕</p>                 | <p>1. 夏の情景を表現しているが、虫の名前が3つ出てきて、その鳴き声も楽しい擬音で表現されている。「キリキリ」「ガチャガチャ」「チンチロチンチロリン」「リンリン」「チョンチョンスイッチョン」など、歌っていると早口言葉のようでもしろうい。夏の夜楽しい虫の合唱団を描きながら床につく様子が想像できる。★残念ながら、小学校ではあまり歌われない。夜の音が想像しにくいことも理由にある。<br/>2. リズミカルに歌うことにより、活舌もよくなる。発音がよくなったところで、音程を整える。この曲は第2間ラが元になっているので、児童音域には優れている。舌根を下げ過ぎると硬い声となり、不自然な声を招く恐れがあるため、舌には力を入れないで発声する。</p> |
| <p>8. 「夕やけ こやけ」<br/>作詞 中村雨紅<br/>ウコウ<br/>作曲 草川 信<br/>大正5年</p>   | <p>①「J」=80~88<br/>②ハ長調<br/>③16小節<br/>④11ケ<br/>⑤4分の2<br/>発声的考察<br/>〔飛躍するところが良い、高いところまで同</p> | <p>1. 「山のお寺」「鐘」「金の星」などのどかな田舎の夜の情景は、子どもの生活にとっても大事な視覚・聴覚効果を生み出す。物ではなく、感覚での経験は成長に大切な要因である。★幼稚園でうたわれることもある。調査では、聞いたことはあるが、歌ったことがないと答えた子どもが8割となった。<br/>2. 「おてて〜」のところが声が児童発声での声である。低い所の「からすといっしょに〜」は、歌いづらいところである。やわらかい気持ちで優しく出す声を探すよう促すことが重要である。</p>   |

|   | じ発声で歌うこと]  |  |
|---|--|--|
| 9. 「うさぎ」<br>日本古謡                          | ①「」=63~69」<br>②イ短調<br>③9小節<br>④4ケ<br>⑤4分の2<br>発声的考察<br>〔低いので、移調すると良い〕          | 1. 『お月様に、うさぎがいるようにみえる』ことで、想像心とその心の発展を考えさせるなどの指導が可能である。世界の神話にまで教養をつけることが可能である。★小学校では教えてはいない。歌っても聞かせてもいないらしいといえる。聞いたことがない子が9割、歌ったことがない子が10割という歌である。<br>2. 八分休符の切り方が難しい。ここでは、規律を指導できるといえる。伸ばして歌いたい気持ちを切ることによって、未練、甘えなどを静止させることができる箇所がある。  |
| 10. 「茶つみ」<br>文部省唱歌                        | ①「」=100~108」<br>②ト長調<br>③16小節<br>④6ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔カキケコの破裂音がはいるので注意〕   | 1. 北海道や東北ではお茶が取れないため、垣根のような茶畑が想像することが困難であるが、その興味深い情景を想像させるように気遣う。春から夏に変化する5月6月の暖かい地方の独特な気ぜわしさなどを織り込み伝える。寒い冬は必ず春になり、夏の訪れとなる自然の原理を織り込む。そして、お姉さんが赤い“たすき”をして“摘む”賑わしい仕事ぶりなども世界に共通する風景であることなども教えられる。仕事歌としては女性的旋律である。優しい気持ちは茶の葉を思いやり、茶としていただく人の心も伝えることができる。★100パーセント知らないと答えた。<br>2. 一拍目をやすむことにより、リズムを協調している。付点音符でんを伸ばすところは、息を溜めすぎないで発するように心がける。 |
| 11. 「春の小川」<br>文部省唱歌<br>作詞 高野辰之<br>作曲 岡野貞一 | ①「」=100~108」<br>②ハ長調<br>③16小節<br>④11ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔発声の矯正に良い〕          | 1. 小川の中に生き物がいることや、一見弱そうな流れの小さな川も流れが止まることなど、道徳心などとともに指導できる素晴らしい曲である。“春”“小川”“岸”など絵画表現も可能な曲である。★8割の学生は聞いたことがあるが、歌ったことはないと答えた。<br>2. 言葉がとてもきれいだ。そのことばをしっかりと発音し、やさしさ、潤い、温厚さ、ささやきなどの情緒心を育むことができる。言語と発声そして、情操などについて、指導者も工夫をして、子どもたちに伝えられる曲といえる。   |
| 12. 「ふじ山」<br>文部省唱歌<br>作詞 巖谷小波<br>イワナミコナミ  | ①「」=92~100」<br>②ハ長調<br>③16小節<br>④7ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔低めであるが、歌いやすい〕        | 1. 「富士山=日本」とも言われている山を題材にしている。そのため、歌いすぎる感がある。誇張して言葉を大きめに歌うことである。しかし、サラーツと歌ったほうが情景が想像できる。決して行進曲や軍歌のように歌わないことが大事である。★90パーセントの学生が知っていることと答えた。テレビで見聞きしたことがある。<br>2. 1番も2番もアから始まる歌いやすい曲である。一拍目に付点4分音符にしてあるため、“ちりめん振るえ”が起きないように、しっかりと吸気する。  |
| 13. 「とんび」<br>作詞 葛原しげる<br>作曲 梁田 貞          | ①「」=88~96」<br>②ハ長調<br>③16小節<br>④5ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔低いがピヨローを歌う時で高めに歌うと良い〕 | 1. ★全員が知らない曲であった。また、とんびについても知らない。さらに「ピンヨロー」という鳴き声も聞いたことがないという曲である。たいへんメロディティックであるが、曲想はもの悲しく情緒のある曲といえる。<br>2. 経過音が多く、母音を伸ばしながら音移動を行うため、呼気に注意しなくてはならない。鳴き声では、「ピンヨロー」「ンニウン」の処理が難しい。鼻腔を開き空気を鼻に押すように“ウンニピン”を出す。   |
| 14. 「牧場の朝」<br>文部省唱歌<br>作曲 船橋栄吉<br>昭和7年    | ①「」=126~138」<br>②ハ長調<br>③20小節<br>④16ケ<br>⑤4分の4                                 | 1. ★この曲を知らない学生は8割、全部歌ったことがあると答えた学生は0であった。また児童合唱団でも100%知らないとの答えであった。「牧場（マキバ）ってなに」と聞いた子もいた。この曲は北海道などの牧場（ほくじょう）ではよく見られる光景である。易しい曲調であるが、歌詞を音符にはめ込むことが、むづかしく何度も歌ってみ   |

|   |  |   |
|---|--|---|
|   | 発声的考察<br>〔子どもにとってCDは低い〕  | なくては（慣れなくては）歌えない曲である。<br>2. 4小節を1フレーズとして、五つのメロディからなっている。スムーズに繋がる旋律は、1フレーズとも取れる名曲である。この曲を歌うことは、音楽的感性を向上させられる教育的名曲であると感じる。  |
| 15.「さくらさくら」<br>日本古謡   | ①「J」=72~80」<br>②イ短調<br>③14小節<br>④3ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔歌いやすい〕                         | 1. 全員が知っていると答えた。お正月に聞いたことがあるなど、日本の歌として、世界的に有名なので、伝承してゆくべき曲といえる。歌詞が3とおりほど存在する。<br>①明治21年までは、①の歌詞で歌われていた。<br>①咲いた さくら、花見て戻る、吉野はさくら、竜田はもみじ、唐崎の松、ときわときわ、深緑。<br>②明治21年（文部省の音楽取調掛から昇格した東京音楽学校が、「箏曲集」を発行する間際に分かりやすく変えた。<br>②さくら さくら、弥生の空は、見渡す限り、霞か雲か、匂いぞ 出ずる、いざや いざや、見にゆかん。<br>③さらに昭和16年（国民学校に組織替えした際に）題名と歌詞を変え「うたのほん」に掲載された。<br>③さくら さくら、野山も里も、見渡す限り、朝日に匂う、さくら さくら、花ざかり。                                      |
| 16.「もみじ」<br>文部省唱歌<br>作詞 高野辰之<br>作曲 岡野貞一<br>明治44年から大正3年<br>まで間 | ①「J」=88~96」<br>②へ長調<br>③16小節<br>④7ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔低い〕                            | 1. 軽快なリズムを使い、秋の悲しさではなく、色鮮やかな秋のにぎわしい自然に目をやること、そして景色を描くように歌うことが、情緒を育むと思われる。秋になるとどの葉も彩り、冬を迎えるという自然界の掟でもある。★35%の学生が知っていた。<br>2. “てるウやま、もみイジ” というところのウとイは、日本語の美しさを誇張できる箇所である。4段（1段4小節）から成り立っているが、3段目の1小節目のC A B C D C Aの音形が3小節目がC D C A G F G A Gと低くなる点と4段目終止に向う気配として、C D C A G F CからF E F A G Fと終止形を作るところが落ち着きのある形で終了している。この3段目4段目の歌い方が非常に難しいといえる。3段目に提起した情景に対し4段目で答える形を取っているため、精神的に続くこと＝フレーズを保つことは忍耐力に繋がる。 |
| 17.「こいのぼり」<br>文部省唱歌<br>大正2年発行<br>尋常小学校唱歌(5)                   | ①「J」=92~100」<br>②へ長調<br>③8小節<br>④5ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔低い〕                            | 1. リズムが弾むように作曲されている。また歌詞は本州と北海道では異なる生活風景についても教えることはできる。瓦（いらか）＝かわら屋根、端午の節句の話などを教えることにより、江戸時代の武士階級、中国の「登竜伝説」さらに国語の「登竜門」の言葉の由来などまで、授業展開すべきである。<br>2. “いいらアかアの” など3番まで歌う間に54回も母音を誇張して歌う箇所である付点が登場する。これらは、発音発声の練習に優れている。児童発声の発音障害などを治すのに優れた曲といえる。  |
| 18.「子もり歌」<br>日本古謡   | ①「J」=80~88」<br>静かに優しく<br>②イ短調<br>③16小節<br>④8ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔発声が暗くなりがち、気をつけて歌うこと〕 | 1. 子守唄の中でも有名な曲がこの曲である。子守唄は「童謡」に入るが、（江戸時後期の学者釈行智シャクギョウチや柳田國男などの分類）小学音楽に導入する曲ではないとも考えられる。親と子の関係について愛情ということを協調したためかもしれない。（日本の子守唄はほとんど、子守りが歌う寝かせ歌である）また、この曲は、1番は「誉めうた」2番は「家びと歌」3番は「ほうび歌」といわれる歌の分類を民俗音楽楽者右田伊佐雄はしている。この子守唄を小学生に教える時、たいへん困難であると察する。またイ短調は八短調に比べ、明るい感じがする。どちらにしても暗いもので、西洋の「寝かせ歌」とは異なる。★聞いたことがないと答えた学生、合唱団ともに50%、歌えるお母さんも少なくなってきたといえる。<br>2. ネーンネーンの発声は基本となる鼻音から始めるため、発声勉強                       |

|   |   |   |
|---|---|---|
|   |   | にすぐれているといえる。伴奏が難しい。   |
| 19.「スキーの歌」<br>文部省唱歌<br>作詞 林 柳波<br>リュウハ<br>作曲 橋本国彦<br>昭和7年<br>「新訂尋常小学校唱歌<br>(6)」 | ①「J」=116~126<br>②イ長調<br>③18小節<br>④6ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔良い高さである。二<br>部にするとさらに良い〕 | 1. 他の唱歌とは雰囲気少し違う。少し明るいといえる。スキーを滑る時の速さを連想させる曲である。また、幸を知らない子どもたちにも遊びを教えている。音符と言葉がうまくはめ込んであるが、なかなか難しい。子どもの歓声が聞こえるような曲といえる。★学生と合唱団は全員知らないと答えた。<br>2. 速いテンポのなかに言葉を入れてうたうが、早口言葉になりそうで、スキー場の様子などを想像して歌うと良いと思われる。<br>タイで結ばれたシンコペーションがたびたび出てくるが、楽しさが表現している。1小節目頭からEFisEDCisEAHCisと1オクターブに渡る音域を出している。呼吸を十分に、リズムに乗って歌う、勉強になる曲で4ある。 |
| 20.「冬げしき」<br>文部省唱歌<br>大正2年<br>「尋常小学校唱歌(5)」                                      | ①「J」=96~104<br>②へ長調<br>③16小節<br>④4ケ<br>⑤4分の3<br>発声的考察<br>〔変声期の子には良い<br>高さ〕          | 1. ★学生、合唱団聴いたことがあると答えたのは75%であった。朗々と歌われる格調の高い曲といえる。歌詞も優れたもので文学的である。1番が早朝の港、2番は昼の田園、3番は夜の村里を表している。ゆったりとした3拍子は安定感をもたらし、子どもの心を和ませる曲である。<br>2. 言葉はとても美しい音でできている。うつくしく歌うように指導する。テープなどに録音して利かせたり、朗読させたり、言葉の意味なども教えると素晴らしい教育ができる。   |
| 21「越天楽今様」<br>日本古謡<br>作詞 慈鎮和尚<br>平安時代末から鎌倉時<br>代の歌曲                              | ①「J」=76~84<br>②変形イ短調<br>③16小節<br>④2ケ<br>⑤4分の4<br>発声的考察<br>〔良い〕                      | 1. この曲で古典的「日本音楽」の指導が可能である。<br>今様は二種類あり、この曲は雅楽楽器を伴奏として、邦語の歌詞をつけるという形である。(もう一つは、仏教の声明である和讃を用いて儀式などで歌われる形)今様とは当世風という意味、この局は代表的なものである。近代では七五調を用いて歌われる。<br>この曲も七五調である。★学生も合唱団印も100%知らない曲である。<br>2. 邦楽作品として、鎌倉時代の雰囲気を出せるように歌う、ここでは平安時代や鎌倉時代の音楽に触れることにより、歴史と郷愁感にも、繋がる日本語のニュアンスを指導できる。ピッチを高めにし、うつくしい母国語を認識させる。                  |
| 22.「おぼろ月夜」<br>文部省唱歌<br>作詞 高野辰之<br>作曲 岡野貞一<br>大正3年<br>「尋常小学唱歌(6)」                | ①「J」=76~84<br>②へ長調<br>③16小節<br>④9ケ<br>⑤4分の3<br>発声的考察<br>〔低い〕                        | 1. ★この曲は学校で習ったことがあると答えたものが療法で70%に上った。八六調の曲である。長野県の風景を歌っている。歌詞の1番「匂い淡し」は香りのことではなく、色が美しく照り映えることをいっている。また、「里わの火影は(ホカゲ)」は里にある家々の灯かりをさしている。<br>2. 流れるような名曲である。Nanohanaなのはなの言葉は、発声の発音練習になる。Irihisure いらひうすれもイでピッチ合わせを行うことができる。  |
| 23.「ふるさと」<br>文部省唱歌<br>作詞 高野辰之<br>作曲 岡野貞一<br>明治42年                               | ①「J」=76~84<br>②へ長調<br>③16小節<br>④7ケ<br>⑤4分の3<br>発声的考察<br>〔良い〕                        | 1. ★全員が知っている名曲である。歌いだしは落ち着いて控えめに歌い始めること、4段目で、硬い決心=誓いのようなメロディとなる。この時代の立身出世などの意味、また、高野辰之の人生なども話すといいと思われる。小学生に話して利かせたい良い話である。<br>2. 「めーぐーりーて」の「ー」は母音をしっかり歌う。鼻音を丁寧に発声すること。  |
| 24.「われは海の子」<br>文部省唱歌<br>〔平成元年発表から80<br>年が経て、詩が宮原晃<br>一郎、と判明〕                    | ①「J」=120~132<br>②ニ長調<br>③16小節<br>④7ケ<br>⑤4分の4                                       | 1. 「尋常小学読本唱歌」とは、国語の教科書にその詩が掲載されたものを指す。この43年教科書は文部省で初めて編纂された唱歌教科書である。明治41年には「海の子」という題名であった。勇敢な元気な歌である。詩もシンプルで覚えやすいといえる。<br>海を賞賛する行為は戦争での海軍を誉める行為であるので、この歌は   |

## 1) 「小学音楽弾き歌い=24曲」(共通教材)について、

|                        |               |  |
|------------------------|---------------|--|
| 明治43年<br>「尋常小学読本唱歌(6)」 | 発声的考察<br>[低い] | ふさわしくないという時代もあり、教科書に載せなかった時代があった。また、宮原見一郎は小樽新聞(現在の北海道新聞)の記者であったことなども興味深いことである。<br>2. 歌いやすいメロディである。ウの発音は難しいのでオからウを導き出すように指導するとよい。“けーむり” —のエはエと発音せず、音振動で補うことが良い。 |
|------------------------|---------------|--|

※1 = 母音数とは、単独韻でしめされている語、赤い(ア)、黄色(イ)など

※2 = ディナーミクとはだんだん大きくだんだん小さくの意味

※3 = 共鳴腔に空気の流れを「当てる」ことをいう。[図2参照]

※4 = これまで外国の曲に日本語をつけていたが、この頃から全くの新作を募集した。この「春がきた」は、新作であった。

教員養成課程本学学生においては、「小学音楽弾き歌い=24曲」(共通教材)を入学時に既に全曲を歌える学生は皆無であり、メロディすら「聞いたことがない」学生が24曲中20曲以上の曲目に及び、学生数の80パーセント以上が、「歌ったことがない」と答えた。学生自身の小学生時、これらの曲が教育現場で活用状況が低かったとの結果であった。その理由として下記のような考察導いた。

## 1. 作曲年が明治43年44年、大正2年~など、約100年前の曲が多い。

メロディも洗練されてなく、西洋のシューベルトやモーツァルト作品からみると、単純ですぐ歌えるため、授業として導入しても1時間(45分)で仕上げる程度である。それを楽器で演奏するととなると、1ヶ月はかかる。そのため、楽器演奏の方が授業と思われやすい。

**改善策案**→伴奏形を1番、2番と変える。また歌う速さなどを変える。母音フォルマント[図3参照]を完全になるまで指導する。

## 2. 歌詞が古い

導入されている情景についても、現代ではほとんど見られないような情景である。歴史的生活様式などの学習には優れているが、学ぶというより、昔の写真を見て説明しているようなもので、学習としては、1時間(45分)で理解できる内容である。

**改善策案**→英語やフランス語などに直して、世界の生活様式のビデオなどから、日本語の良さを導き出す。

## 3. メロディが古い

単純であり、音楽的ではない。口ずさむような曲は少ない。

**改善策案**→テーマを編曲せず、どんでんアレンジして学童が楽しめるように編曲する。また、似たメロディーを探すゲームを指導者が提供する。

## 4. 曲が短く、一つの景色などについて歌うものが多い

8小節(2段)3曲、9小節(2段と1小節)1曲、12小節(3段)3曲、14小節(3段と2小節)1曲、16小節(4段)14曲、18小節(4段と2小節)1曲、20小節(5小節)2曲など16小節が最も多かった。

**改善策案**→3. と同じように、展開形を提示する。曲が短いので間奏など入れ工夫する。

5. 心が変化することを歌う曲がない。

心理的变化を歌う詩がない。情景説明や状況説明の歌内容である。

**改善策案**→心理的变化が「すくないように思われるがそうではない。心の変化をつけるように詩を何度も読み、暗唱する。その後想像される情緒を歌うように導く。

6. 伴奏が単純過ぎるために、展開部分がすっぱり抜けてしまう曲が多い。

伴奏形が鍵盤楽器での受験のためか、単純であるもの、または決まったモチーフを持たないものなど、演奏しにくいといえる。

**改善策案**→編曲を多いにすべきである。

7. 覚えづらい曲が多い。

メロディが単純なためと、詩が細かい語数のためと現在の生活で使用する言葉と異なるために覚えづらいといえる。

**改善策案**→創作活動に繋げる。曲の理解を図形などを使い指導する。生活様式も異なり、社会世情変化も大きく関係していると思われる。

## 2) 文部省「教育法」に示されている「音楽的発達を促す」とは、

しかし、唱歌は素晴らしい曲が多い。歌い継ぐべき名曲があるといえる。例えば「春がきた」「冬景色」「ふるさと」などである。素晴らしい曲はどんなに時が経ても変わらない名曲である。

音楽教育の目的とりわけ“歌”は、マルチン・ルッターが提唱しているように、生活のリズム、調和などを身につけるための最上の教育方法であることである。音楽的発達とは、即ち「人間らしい生活を行う発達を促すこと」といえる。音楽そのものが持つ特徴が掲げられる。

①歌唱指導, ②感性との連動, ③児童発声法などについて考察する。

### ①歌唱指導

ここでは音楽の中心といえる歌唱について取り上げる。直接人間を鳴らす作業は、楽器演奏より、人間育成に効果があるといえるからである。

歌唱指導とは、その曲の背景や詩の意味を教えることはもちろん、音楽用語を踏まえた指導を行うことに意味がある。音楽用語には“拍子”“旋律”“休符”“曲想”“和音”などが含まれており、それらを踏まえて何度も歌として復唱することに音楽教科の人間力向上教育に役立つと考えられる。まず「拍子、旋律、休符、曲想、和音」について人間力を育むと考えられる理由を述べるとする。

「拍子、旋律、休符、曲想、和音」について

【拍子】(規律) 限られた時間空間の中で、規則に従い、それを逸脱しては、曲にはならないからである。ここでいう音楽の規則とは、決められた小節、拍数、進行方法に従うことを楽譜で表すことを指す。ここでは、定められた規律の中で空間を見出し、その中で自己表現する方法を見つけることができる。



【旋律】規則に従いながらも自己表現をしてゆく。表現したいことをメロディラインに自由に心を高めたり沈ませたり、思い通りに快感を与えたり与えられたりするものである。ここでは、自己認識、自己表現など自分と自分以外のひととの関係を予測する練習ができる。

【休符】（沈黙）規則に従いながらも、休む沈黙を要求される箇所である。ここでは「傾聴の訓練」「言葉を発しない」などが育成される。“待つ”行為を学ぶことができる。

【曲想】音と言葉により表現方法を身につけることができる。自己表現と自分ではない表現が演奏を通して行われる。また、作曲者、作詞者のことを考え、想像力を養い、同時に自分のその演奏時の自分と重ねて自己表現するものである。ここでは思いやりや自己制圧、自己分析などが行える。

【和音】ハーモニーともいわれるが、音楽を作るときの協調性や同調性を考えて重奏や重唱が行われる。決められた音楽的規則に従い和音を作ってゆくのであるが、その時、規則を破ると聞きなれないひどい音となり、改めて規則に従うことを学んでゆくのである。ここでは、他の様々なものと、礼儀を交えて協調・同調する従順な心を学ぶことができる。

以上の音楽の特性は、単に楽しむ音ではなく「生きる力」＝「人間力」を育む要となる。

これらの精神的効果を感性からの効果という。

## ②感性との連動

感性は人間が行動を起す指令の源であり、理性をも支配するものである。感性の充実を図る一方に理性が存在する。決して反対語ではない。感性は人間の生活すべてといえる。「起きる」「歯を磨く」「食事を取る」「友人と話す」「勉強する」「このことを止める」「悪い行いをしない」「絵を描く」「目的地までの道を歩く」これらすべて、大脳からの指令である。大脳は人間の行動全般、生理・心理・行動を導く効果を高める司令塔で有り、人間生命体の核といえる。大脳は聴覚・視覚・味覚・臭覚などの影響を受ける。なかでも音楽や話を聴く、聴覚は身体への振動となり、直接に<sup>※5</sup>大脳を刺激するといわれている。聴覚を通ず音楽は人間力を向上させる。※5音楽を感じる脳として、α波などの脳波データをポジトロン断層法である音を可聴領域と聴こえない超高周波とに分け、脳の反応を見た結果、超高周波を含む音を聴いている時、脳の基幹脳における活性が高まり、人間の感受性を快感の誘起または負の刺激の緩和の方向に変調させることが立証できた。また、超高周波成分は快感によって、人間の行動を制御する報酬系の回路と生命活動の根幹を担う自立神経、内分泌、免疫を司る生命制御系の回路を並行して活性化させることが解明されてきた。この二つが重なるのが、脳幹、視床など脳の深い部分である。これらが心身の状態を適正化するとともに、快感を発生させると考えられている。以上 大橋 力（文明科学研究所 所長）

従って、音楽授業によって“歌う”ことはとても重要である。脳を活性化することができるといえる。子どもが歌う時、気をつけねばならないことがある。発声法には、体が成長している人への普通の発声法と、老人などへの老人発声法、そして、児童発声法である。音楽教育において“体の成長に関わる部分”の提起が欠落している点について考察することとした。

※5 参考資料 大橋 力、知覚をこえる音世界と脳-ハイパーソニック・エフェクトへの招待-日本音響学会聴覚研究会資料, Vol. 36, No. A, H-2006-A2, 2006.

### ③児童発声法

昨今の小学生が、児童発声法について、理解が深い指導者のもとで、音楽指導を受けているかというそうではない。音楽指導の先生は、ピアノ傾向の先生、器楽傾向の先生、声楽傾向の先生など様々である。“声”についての指導は専門家（ここでいう専門家とは、「声楽」の勉強を大学などで専攻した人）であっても難しいものがある。声と同じ人は、一人もいない。声は人間の様々な表現力を持てるものであり、人体が言葉を発する、重要な箇所である。歌うことは自己表現することであり「心で歌う」といわれ、人間性に繋がると考えられている。子どもは成長とともに、声帯<sup>※6</sup>も大きくなるが、6歳、8歳、10歳ぐらいまでは、成人のソプラノより小さく、高い声である。小学音楽の楽譜は本来の子どもの声より音声学的には、すべて低いといえる。子どもにとっては歌いづらいのである。しかし、経験がない子どもは歌うことが「このように歌いづらいもので、あまり楽しくない」と感じ、歌う行為に消極的になることが多いと考えられる。もっとも、ここで提起されている24曲の曲が完成したのは、音声学や音声生理学が盛んではない時代に作曲された。また日本において、明治時代には、耳鼻咽喉科は存在しても、声帯の研究者は、存在しなかった。しかし、すでに子どもの歌に位置する“唱歌”は存在し、訂正（移調など）はできない状況であったと察する。さて、児童発声についての考慮点について、ハーモニーを歌う時（合唱時）、ブレスのタイミングやブレスの大きさ、深さ、回数などの考慮が必要である。身体が小さいことは息の容量が小さいことで、それは特徴であり、苦心するところである。メロディーは聴覚の発達と声帯を含めての筋力が未熟な時期と完成の時期と、その成長に合わせて変化するため、その身体の緊張と弛緩において、専門的導き方が必要となる。神秘的美声も、変声期前の声と変声期終了後では、どのような声を持つかは、体調の管理と関係があり、健康のチェックにもなる。低い曲は移調して提供することが望ましい。

### 3) 児童発声の「発語・発声」についてと〈人間（心身）発達〉について

ここでは、「発声」について、日本の現状について、述べる。すべてはここに心身の発達を向上させる感性についての良い悪いにつけ、原点があるからと考察されるからである。

耳鼻咽喉科の医学博士の米山文明先生は「日本では、一生涯、発声の教育を受ける機会がない」といっている。新生児が発語を持つ2～3歳までに、発声に対し感情を発する声のみの期間がないわけです。“ママ”といったように聞こえるなり、「ママは私よ！」と自己主張型母。ほんとうは、喃語のママママだったにもかかわらず、親たちは「もう！言葉を話したのよ！家の子は天才よ！！」とのごとくである。ですから、ヤーヤーヤ！、ワーワー、ギリギリ、ウ・マ・ゴ・ア・チャ・キュなど発声に必要な音を経験せず言語に入ってゆく。経験が少ないため、生活圏である日本以外での言葉を聞き取れない。文章などを覚えるにも進捗度は遅いとも考えられる。また、驚き！嬉しい！悲しい！の声はどのような音か？これらを歌唱に置き換え、音声づくりが体験され歌唱になってゆくのである。そして言語が乗るのが歌なのである。教師や母親たちは「発声の教育」について深く学習しなければならない。そのことが能力開発

の最短距離といえるからである。

4歳～5歳は脳細胞の結合が行われるのですから、脳の前頭連合野の発達を促すために、情操・創造・思考を向上するための発語・発声でなくてはならない。義務教育小学校での発声教育が、人間の動作や行動、思考などと結びつけて行われるべきである。そのようなことを経験しないで小学校に入学し、すぐに習う歌が跳躍のないメロディでは発達を促すことはできない。24曲の中には「スキーの歌」「とんび」「むすんでひらいて」「富士山」などおおくの優れた歌がある。これらの歌は難しいといえる。発声の基盤になる姿勢・スタンスによって声質が違うことを学ぶことができる曲である。非常に重要な健康医学の基である。これを知らないと知るでは、健康に大きな差が出る。昨今、指圧や骨を真直ぐにするとかの診療のような所が増えているが、日本人の新生児発声問題が壮年期・老年期に健康問題が表出している社会状況とも取れる。(スポーツなどを年齢的に早くから長く行っている人は、声もいいが、姿勢もよしい、健康といえる方が多いように思える)「発声」は「呼吸法」といっても良いほど、関係が深い。呼気、吸気について、噛み砕いて学童に教えることは、人間形成や育成の浸透にも大きく関わる。

さて、歌の詩の発声において母音〔図3参照〕の発し方、歌い方など、処理の仕方は、とても重要である。声の美しさは、母音の練習により声を作るといえるからである。また、学童に指導するに当たり、児童発声を考慮して歌ったり、話したりことをすると、発語発達が早められる。また、活舌が明瞭となることが実証されている。そのことにより、大脳の言語ブローカが頻繁に合図を送ることが、わかっている。歌うことが健康に良いのは大人だけではなく、子どもにも良いといえる。児童発声は成長とともに変化し、声質が変わってゆく。それに伴い美しい声、にごった声など変化してゆく。男子は変声期が目立つ面があり、重たい声になり、歌うことが嫌いになる児童も増える時期である。(女子も変声期はあるが、声が枯れる程度と体がだるい、疲れやすい程度である)学童の発声は歌う時ばかりではなく、遊ぶ時、朗読する時など、声帯に息を通し音となる点など教授する必要がある。体の成長は児童発声の「発語・発声」に関連深く、＜人間(心身)発達＞と関る。学童期精神性向上に十分な発達を促されなければならない。音楽教科学習時間に“音楽的発達を促すことについて、”行うことにより、十分に学童の心理を充足させることに繋がり、精神安定、思考力向上、想像力向上など感性充実が提供できると考える。<sup>\*7</sup>

※6 図1, 図4参照

※7 声は声帯で出す音声ではなく、体に入った空気を上昇時に声帯を振動させて、頭部にある骨などにぶつけて音声とするものである。声帯は発生音を持たない、言葉の発音は頭部にある筋肉や舌で調節し、発語となる。これらの音振動は精神的にも身体的にも心地よいものである。

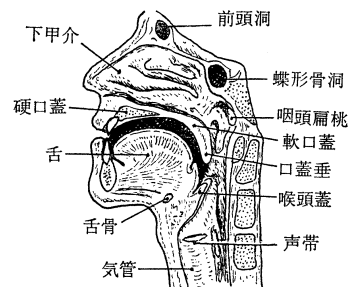


図1. 共鳴腔

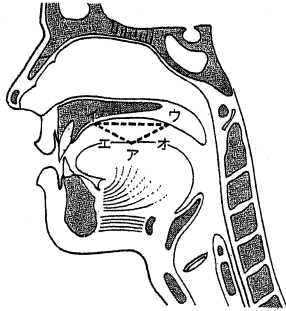
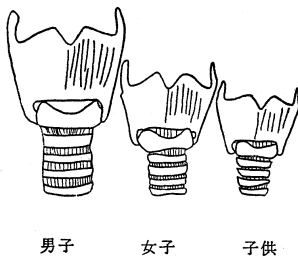
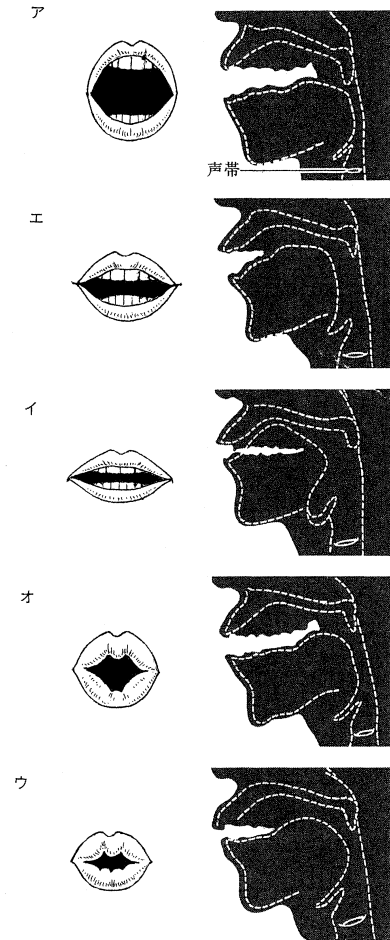


図2. 共鳴のピラミット



男子 女子 子供

図4. 子どもと成人の声帯の大きさ (グッツマン提供)

図3. 母音のフォルマント  
(切替一郎氏による)

## ま と め

明治44年発行の第1学年用から大正3年第6学年用の教科書の中には、「ふじ山」「春の小川」「うみ」「ふるさと」などがある。これらの曲は定番で、毎年約100年間変わらず、学童に提供されてきた。しかし、歌えない、知らないという若者が増えている。その歌われない曲が教員採用時の弾き歌い試験曲となっているが、もうそろそろ、小学校教員になるための音楽については、大きく改正が必要と考えなくてはならない時期といえるのではないだろうか。

また、これら唱歌は「作者不詳」とされてきた。(これは当時の文部省は、音楽取調掛の伊沢修二たち文部省関係者たちは、「尋常小学用唱歌」を作成するにあたり、作詞部門と作曲部門にわけ、委嘱された曲を委員会が修正や補足など審議されて、教科書に載せた背景があり、特定者の名前を記載することを問題があると判断したとのことである。今後は残さなければな

らない唱歌は編曲・移調など行い、和声学的に世界に通じる曲として、歌い継がれるべきである。これらを小学現場で歌われるための高い感性を持ち合わせた教員養成が必要な要因であると考え。昭和22年ごろから「NHKこどもの歌」、「新しい童謡」の出現など、ラジオやテレビで、楽しい歌が増えてきた。また、武満徹、山田耕筰、中田喜直など、世界（特にヨーロッパ）の音楽書店でも置かれている日本を代表する作曲家のしゃれた自然風景、生活、心理状況など描写の良い子どもの歌も出現している。また、テレビ漫画の主題歌「一休さん」「鉄腕アトム」「アルプスのハイジ」などはヨーロッパの子どもたちに大人気である。これらは、人間性が感じられる作である。これらのことも踏まえ、「こどもの歌」について再考することを示唆するものである。

参考文献 「子守と子守歌」 右田伊佐雄 東方出版1991年9月10日発行

「私の心の歌 夏・秋・冬・春」 学習研究社2005年11月15日発行

「小学校課程のための教科教育法」 音楽編 教育芸術者

「小学校課程のための音楽教育方」 音楽之友社

「こえとことばの科学」 林義雄 著 鳳鳴堂書店 1995年3月1日発行

「声がよくなる本」 米山文明 著 主婦と生活社 2002年8月30日発行

「声と日本人」 米山文明 著 平凡社 2007年第5刷発行

「Il canto e le sue tecniche」 Antonio Juvarra 著 RICORDI 社 発行不明

図 図1. 共鳴腔（発声法須賀靖元著 カワイ楽譜1965）

図2. 共鳴腔の逆ピラミット（「声がよくなる本」 米山文明 著 主婦と生活社 2002年）

図3. 母音のフォルマント（切替一郎著「新耳鼻咽喉科学」南出堂1967）

図4. 子どもと成人の声帯の大きさ（林義男著「声と言葉の科学からグッツマン提供図、鳳鳴堂書店 1995）

